

Title	明治歳時記概観
Sub Title	
Author	杉浦, 功一(Sugiura, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1992
Jtitle	三田國文 No.17 (1992. 12) ,p.26- 34
JaLC DOI	10.14991/002.19921200-0026
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19921200-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治歳時記概観

はじめに

明治年間に刊行された主な俳諧歳時記を見ると、初期には江戸時代の歳時記の模倣書、およびそれを太陽暦に見合うよう改良したものが多い。

明治三十年代に入ると、俳句革新運動の影響を受けつつ、新しく独自の歳時記が現れはじめる。それらには、まず近世歳時記で膨大な量に上った収録季題数を、実用的な量に精選する動きが見られる。また、季題解説のあり方も文献的知識を集成するだけでなく、俳句の題材としての詩味という視点からの位置づけを試みる歳時記も現れる。

明治末期には、「辞典」の名を冠する著作の盛行に表されるごとく、季題に対する近代的解釈を解説文に盛り込んだ大作が相次いで出版された。それらの書中には新季題が多く収められ、科学的知識や外国文学の知識をも動員した解説がなされている。

杉 浦 功 一

一、明治初頭

——〈四季部類〉の改良と『俳諧手洋灯』

明治年間に発行された歳時記をみると、その多くが江戸時代後期に編まれたものの復刊である。とりわけ明治初頭にはその傾向がいちじるしい。

安永九年刊『俳諧四季部類』は季題を四季十二ヶ月、さらに部門（乾坤、植物類、生類、衣食類、神祇、公事故事等）に分類して掲げた小型の季寄せである。のち嘉永年間には、『増補四季部類大全』という絵入りの版が作られたり、安政年間には『拾遺四季部類大全』が編まれたりしている。広く使われた季寄せだったのであろう。

この〈四季部類〉の類の盛況が明治初期まで続いたようである。国立国会図書館には、明治初年から十年代までに発行された歳時記は十八種収められているが、このうち四種は〈四季部類〉の復刊である。また〈四季部類〉に多少の新工夫を加えたものも目立つ^{注1}。

明治五年、政府が太陽暦を採用する。この新暦は旧来の季節感と衝突することとなり、明治初期の歳時記の工夫は主としてこの問題に向けられたものであった。

太陽暦による最初の季寄せは、明治九年二月刊の『新編俳諧題鑑』（横山利平編、三森幹雄校訂、三森幹雄・伊藤有終刊）だとされている（明治書院『俳諧大辞典』『連歌俳諧略年表』）。

この季寄せは序文によれば、「四時を分ちて鳥獣草木衣食等の物を表し、神祭仏事の時目を太陽暦にあはせて撰み定め」「廃止て用ゆべからざるは除き、遺風を行るる物は頭に黒点を加へ分ちて載たり」というものである。

本書には〈四季部類〉の影響が見られる。まず季題の分類が、月別、さらに各月内は乾坤、植物、生類、神祇、公事故事の部門分けであり、〈四季部類〉と同じである。また、季題に短い解釈を付した部分が九箇所あるが、これらの解釈文の六つまでに〈四季部類〉の影響が見られる。例えば「駒迎」に「諸国の御牧より駒曳て来りし也」とあるのは〈四季部類〉の「諸国の御牧より駒引て来る事也」とほぼ一致する。ただし、季題個々の配列順は〈四季部類〉とは異なっていて、この点が他の〈四季部類〉改良書とは違ふところである。

さて本書の第一の特長は太陽暦に合わせて編集した点である。これは具体的には、自然に関わる季題を旧来よりひと月遅い月に掲げる方法である。この方法は以後の歳時記に受け継がれ、今日に至っている。なお序に言うもう一つの工夫「廃止て用ゆべからざるは除き、遺風を行るる物は頭に黒点を加へ」て区別したというのはあまり徹底されず、旧題の整理が行届くの

は明治後期の歳時記まで待たねばならない。

次に明治十三年六月に出版された『新題季寄俳諧手洋灯』（萩原乙彦編、正文堂・玉海堂刊）について述べる。この季寄せの作者、萩原乙彦については、明治書院『俳諧大辞典』に以下のごとく記されている。すなわち「俳諧を道彦系の者に学び、明治元年には為山の門に入り、蕙の本・十時庵・蕉華庵と号し、戯作には二世梅幕里谷峨その他数号がある。（中略）月並宗匠の傍ら古俳書の蒐集に努力した。明治二年『俳諧新聞誌』を刊行、のち『对梅宇日涉』と改題したが、今日の俳句雑誌の嚆矢である。明治十三年、太陽暦による季寄『新題季寄手洋灯』を編し、また人情本の著が多い。静岡新聞社長に招聘された事もあったが、晩年は不遇に終った。」これらの経歴からすると、彼はかなりの精力的な人物で、ジャーナリスティックな資質も備えた俳人だったと思われる。

『俳諧手洋灯』はこの乙彦の個性を強く反映した季寄せであった。本書はまず、四丁に及ぶ「附言」を持つ。これは『山ノ井』以来「新編題鑑」までの歳時記史で語り起こされ、続いて本書成立のいきさつを述べた文章である。歳時記史に新たな一冊を加える意気込みが感じられる。

手洋灯という名からわかるように、著者は『俳諧手挑灯』（延享二年刊の小型の季寄せ）を意識している。だが乙彦自ら「本編ハ『年浪草』ニ依リ」と「凡例」に述べたごとく、内容上には『華実年浪草』（天明三年刊、十五冊の歳時記）の影響が濃い。まず本文の表記法が〈年浪草〉と同じく、漢字カタカナであるし、季題が〈年浪草〉所載の順序に並べられた箇所も多い。し

たがって『俳諧手洋灯』に因む命名は、袖珍本一冊という体裁の共通性からに過ぎない。そして本書の季節の分類法(月分け、さらに各月内で乾坤、公事、神仏、人事、衣食、家財、草木、気形等の部門分け)は、月分けのみの〈年浪草〉ならびに〈手挑灯〉よりも行届いていて〈四季部類〉に近いし、「方今廃レテ行ハレザル物事ハ・此標シアリ」という旧題の扱いは『新編俳諧題鑑』に倣っている。つまり本書は様々な先行書の特長を取込んで編集されたのである。

だが本書の独自性は、何よりも季節解説文の内容にある。そこにまず目立つのは新暦を始めとする新しい文化習俗への反感である。例えば陽暦に従った月見や節句を非難するかたわら、「菊」を十月に掲げて

(前略) 抑菊ハ花ノ隱逸ナル哉。陽暦ノ今強テ手折ラントスレバ桃花アリ。五月ニモ亦強テ引ントスレバ菖蒲アリ。九月ニ至リテ菊花ヲ如何トモスベカラズ。節ヲ全ウシテ人威ニ媚ズ、其高尚ナル、吾輩イヨ／＼重賞スベシ。

と述べるのはいかにも乙彦らしい。彼は陽暦に限らず西洋化一般に対して反感を持っており、以前に著した漢和辞典『漢語二重字引』(明治九年刊)でも、「文明開化」に「ヨノナカミゴトニヒラケル。洋フウニナルニハ非ず。ケダシ日本ニハ日本ノフウアリ」なる解釈を付けているのである。いっぽう季節の考証に熱心なのも『俳諧手洋灯』の解説文の特徴である。例えば「初鮒」に関する問題を、〈年浪草〉の記述を引用するにとどまらず、「愚按……」として『通俗志』『毛吹草』等八つの文献を検討している。もっともそれは、「初鮒」を三春にわたる季節と定める

か二月のみの題と定めるかという問題である。総体に言って、編者は事物そのものへの関心が高いようだ。しかも文献的知識を偏重する。その結果、この個性の強い新著も、根本的には知識集成的な近世歳時記のあり方を抜け出せぬ一冊となってしまう。

二、明治二十年代

——〈葉草〉への注目

江戸時代には数多くの歳時記が出版されたが、嘉永四年に刊行された『増補俳諧歳時記葉草』は、近世歳時記の決定版というべき書であった。これは馬琴による『俳諧歳時記』(享和三年刊)に藍亭青藍が増補を加えたもので、四季に分けた季節を、各季ごとにいろは順に掲げ、多岐にわたる文献に基づく解説を付している。

この〈葉草〉の復刊が明治二十年代を中心に目立っている。^{注2)}そして、明治期に作られた歳時記には、〈葉草〉の影響下にある書が少なくない。例えば『俳諧歳時記新葉草』(山口素楊編、明治十五年七月、風月堂刊)は〈四季部類〉を上段に〈葉草〉を下段に配して掲げたものである。また『明治歳時記葉草』(三森幹雄編、明治十五年三月、錦城書樓刊)は、実際には『俳諧手挑灯』に手を加えた書であるにもかかわらず、「葉草」の名を冠している。さらに明治後期の大部な歳時記や辞典にも、後述するごとく〈葉草〉の影響が認められるのである。

さて、〈葉草〉復刊のラッシュと時期を同じくして登場した歳時記に『明治歳時記講義』(花月園為麟編、明治二十五年五月、

花月園刊」がある。本書は季題を月分けに収めている。そして序に「一題毎に簡便の解を加へ、尚解を要せざる桜鶯の類は別に部決し」たと述べるごとく、各月内は簡略な解説を付した季題群を先に並べ、その後に「解を要せざる題」を掲げている。

この書の解説文はほとんど「葉草」の文章を要約したものである。例えば「睦月」にある「世の人互に行通ひいよいよ睦むより名づく」は、左の「葉草」の説明の要約であろう。

正月をむつきと申侍るはしる人いよいよしたしみむつぶるわざをしけるによりて此月をむつびづきと名づけそれを略してむつきと云也

また、題の配列も、多少乱れながらも「葉草」のいろは順と一致している。

ところでこの歳時記の序には、旧来の歳時記を「是迄世に歳時記の類幾種あるも其注解なし。偶に解あれば長文又は解のなきもあり。」と評した部分がある。これは「四季部類」や「葉草」への批判であろう。「四季部類」には微かな例外を除き、解説文が無い。いっぽう「葉草」には煩わしいまでの「長文」の解説が続出するとともに、全く解を欠く項もある。そこで「明治歳時記講義」は必要にして充分な「簡便の解」をねらったのであった。その試みは、ほとんど「葉草」を要約しただけに終ってしまった。だが「年浪草」「葉草」で項目、解説ともに膨大にふくれ上がった近世歳時記から、質量ともに必要にして充分な情報を精選することは、明治の歳時記の大きな課題のひとつであった。その課題は、後述する明治三十年代の著作に至って達成されていくのだが、『明治歳時記講義』はそれらの先駆であったと

言えるだろう。

なお、本書発行の翌年には『季寄手引草』（一事庵史葉編、明治二十六年一月、弘文館刊）という本が登場している。これも「葉草」および『俳諧手挑灯』の解説文の要点を取り出して季題解説を行ったもので、『明治歳時記講義』と似た性格の書である。

三、明治三十年代

——実用性と文学性の追求

明治俳壇は、明治二十年代後半から、正岡子規に始まる俳句革新運動の時代を迎える。歳時記のあゆみを見ていくと、明治三十年代半ば頃から、俳句革新の影響が現れてくる。

まず、高浜虚子がこの時期、『袖珍俳句寄せ』（明治三十六年二月、俳書堂刊）を編んだ。彼はその序にこう述べている。

此書は目下の必要に應ぜんが為め軽便と実用とを主としたり。明治の新題をもいくらか加へたれど、此書の取得は其よりも古き歳時記にぐちゃぐちゃとある unnecessary (比較的) 題を除き去りたる事と、新分類法によつて排列したる事に在り。明治の新題の外は概ね旧曆に従ふ。これを新曆に引直し純然たる明治の新歳時記を作るといふ事此袖珍俳句季寄せの任務としては重きに過ぐ。一月一日より十五日迄を新年之部として春夏秋冬四季の外に置く。始め稿原を作る事は紅緑を勞し、鳴雪、碧梧桐、余之を取捨したり。

この序文には本書の特長が二点述べられている。ひとつは「古き歳時記にぐちゃぐちゃとある unnecessary」な題の整理である。その

結果、収録した季題は千二百題ほどとなっている。これ以前の季寄せは袖珍本でも三千題前後を並べていた。例えば『新編俳諧題鑑』は約二千七百題、『俳諧手洋灯』は約三千二百題を収めている。それらから見ると千二百題はかなり整理された数である。また季題解説文についても簡素化を図っている。解説は全体で百箇所ほど、ほとんどは人事題に付されたものである。出典は〈葉草〉で長文のものは適宜省略して使っている。例えば本書で

水取 二月堂行 南都東大寺に於て朔日より十四日まで之を行ふ 七日夜又十四日の夜ともに水屋の井に於て牛王を貼するの水を取る 是水を取といふ

とあるが、〈葉草〉には「之を行ふ」の後と「水を取る」の後とに詳細な説明があり、その全文は右の五倍ほどの長さを持つ。『袖珍俳句季寄せ』は収録題数のみならず解説文でも旧煩の整理に努めているのである。

次に、この季寄せのもう一つの特長は「新分類法」である。これは時候、人事、天文、地理、動物、植物という部門分けで、虚子はのちに「斯る分類法は子規をはじめとするもの」（昭和九年『新歳時記』序文）と言っている。そして、「概ね旧暦に従うしかなかつたと序に言うものの」、「新年之部」の設置と、月分けをせずに各季節部門分けという形を取ることによって、新暦とのずれは事実上生じなくなっている。

なお「いくらか加」えたという「新題」は、ラムネ、糸瓜忌、クリスマス等、割合積極的に採り上げていて、この辺りには新しい俳句との共通性を見ることが出来る。

右のような工夫によって本書は「軽便と実用」という課題を果たした季寄せとなった。この成果は当時の読者に認められたようで、三年後の明治三十九年には、本書に月分けを加えただけの模倣書『月分俳句季寄せ』（岸広吉著、明治三十九年八月、広集堂刊）も出版されている。

さて、『袖珍俳句季寄せ』が出た明治三十六年には、子規門下の俳人によってもう一つ、『歳事記例句選』（明治三十六年八月、内外出版協会刊）なる歳時記が生み出されている。これは寒川鼠骨の著である。

本書は書名に示すごとく各季題に「例句」を挙げた点を特長とする。それだけならば旧来の類題句集と大差ないが、それ以上に本書は季題解説の文章が新鮮なのである。

春の日 ぽか／＼と暖かく、ものうく、気長く、頭痛する如く、又うつとりとして気分が浮くが如き春の天気を云ふなり、（以下略）

花野・秋の野 小草の花のいぢらしく咲き満てるを花野といふ。

秋の蝶 大方は白いさびしい蝶々なり。

これらは季題の印象を情緒的な表現で綴っている。また、「二日灸」という古い習俗に、「明治の世に斯かる愚を演ずる者は少なる可きも、お灸と言へば何となく可笑しく発句になりさうなり」という評を加えたり、「有無日」という宮中故事に「明治の俳人は斯かる事を作らずともよし」と書き添えたりして、季題の文学的価値を論じている。

近世の歳時記は、専ら季題についての文献的知識を盛る百科

辞典であつた。〈年浪草〉そして〈栞草〉がその典型である。ここではその季題が作品の題材としてどんな価値があるかは置き去りにされがちであつた。明治に入つてもこの傾向が続く。個性的な『俳諧手洋灯』さえその域を出なかつたことは前に述べた。ゆえに、文学的立場から、作句する感覚を基にして季題を語つた『歳事記例句選』は画期的なものだつたと言ふことができる。

ただし、この態度は行き過ぎると型にはまつた文学的感覚の押しつけになりかねない。だが鼠骨は、あくまで歳時記は実作従う存在であることを断つてゐる。春・植物の部の末尾に、次のような言葉がある。

（前略）右に挙げたる外に、見る可く趣のある花は百千無数にして一々に挙げるを得ずといふ可し。（中略）唯俳人若し実地に臨みて美を感じし花、又は草木あらば悉く其の詩材に入れて可なる可く、其詩にして若し傑作なる、やがて其句中の草木は後人の手によりて歳事記に編入さる可きなり。

——歳時記のための歳時記でなく、作品のための歳時記が登場した、と言ふべきところか。ここにも俳句革新運動の歳時記への影響を看取できる。

四、明治末期の歳時記

——辞典の盛行と『新修歳時記』

日露戦争後の明治四十年代には、『辞典』の名を冠する歳時記の刊行が相次いだ。

まず明治四十年六月に、『季題辞典』（服部耕石編、大東社・俳書堂刊）が出る。これは初めて辞典と称した歳時記だが、実は小冊で、前述の『袖珍俳句季寄せ』同様の簡便な季寄せである。ただし好評だつたと見えて三年後に『俳諧ポケット歳時記』の名で復刊されている（明治四十三年六月、青山堂刊）。

辞典を名乗るものとしては次に『俳諧辞典』（武田桜桃編、公文書院刊）が明治四十二年二月に登場する。これは四六判の大きさを持ち、いろは順に二千五百余の語を収めて解説を付したものである。収録語の大半は季題であるから、本書は実質的には歳時記といえる。

歳時記としての『俳諧辞典』の内容は〈栞草〉の影響を見せるとともに、『歳事記例句選』の文学性も引き継いでいる。また解説文は口語体である。口語体による歳時記としては最初のものではないだろうか。以下本文の具体例を示す。

初暦 暦を売るのは冬だが、披いて見るのは春だ。冬から用ひるけれども、春になつて用を弁ずるから矢張春だ

これは〈栞草〉の「凡暦を売るは冬とし、初て見或はひらくを春とす。冬より用れ共春の用を弁ずる為なれば春勿論なり」を口語訳したものである。同様の解説文がきわめて多い。しかし、独自の眼による文章も所々に見出される。

夜梅 月明の夜には殊に梅の香が高く、昔は雅人等が集まつて夜梅を尋ねて歩いたり、夜梅の庭に対して宴を開いたり等したものである。今でも東京では、湯島天神、亀井戸、其れから角筈銀世界などが有名であつて、月の宵などになると逍遙の人が多い

寒造の酒 寒曝 酒は寒の間に造るもので、其酒は腐敗し難いと云ふのである。けれ共近來は釀造法が進歩して必ずしも寒の内に限らぬけれども、暫く旧來の規定に従つてよい、亦寒中酒を造るのは、頗る見事で、昼とはなく、夜とはなく、三分五時間を競ふ時間的の仕事であつて裸体のまゝで水を破つて水中に飛び込んで米を磨ぐなどの仕事は、見て居ても厭々しい、それに酒造り歌と云ふ一種の音頭もあり、詩味にも富んで居るし、亦一寸變つた活社会である（以下略）

「詩味」に言及する姿勢は『歳事記例句選』に通じる。本書の「鞦韆」「引鶴」などの解説文には『歳事記例句選』の記述と重なる内容も認められるので、本書が『歳事記例句選』を意識していたのは確かである。なお著者の武田桜桃（鶯塘）は、明治書院『現代俳句大辞典』によると、博文館で雑誌編集に携わり、巖谷小波らの下で児童文学の言文一致体の実現に協力したとある。本書に口語体を用いたことは、その仕事の延長線上にあるだろう。ともあれ、『俳諧辞典』は、先に出了た『季題辞典』と比較しても、いろは配列で全項目に解説を付す、近代的辞典の姿により近づいた本といえよう。

しかし俳諧の辞典としては、『俳諧辞典』に約半年遅れて出版された『新撰俳諧辞典』（岩本梓石・宮沢朱明編、明治四十二年七月、大倉書店刊）が、明治期を代表する決定版となる。

『新撰俳諧辞典』は、四六判八百四十頁余、この頁数は『俳諧辞典』の約二倍である。収録された語の種類は季題をはじめ連句用語、人名、地名等広範囲にわたり、それらを五十音順に

配列して解説を加えている。季題は巻末に「季寄」として四季順に掲げられてもいる。

本書の歳時記としての側面を見ると、季題解説に〈葉草〉のみならず『言海』（大槻文彦著、明治二十二年二十四年刊）の説明も取り入れている点が目新しい。例えば「通草花」の

山野に生ずる蔓草、其葉萩に似て大なるは四五寸、五葉一処に集り生ず、三月葉間に三弁の淡紫又は白の花を開き秋、実を結ぶ、形瓜の小なるが如く熟すれば紫なり。

は、『言海』中の「あけび」の解説、

（前略）蔓草ノ名、山野ニ多シ、葉ノ形、楕ニシテ、五葉、一処ニアツマリテ生ズ、大ナルハ四五寸アリ、夏ノ初、若葉ノ間ニ、細キ枝ヲ垂レテ花ヲ開ク、三弁ニシテ、大サ四五分ナリ、色ハ薄紫ト白トノ二種アリ、実ノ形瓜ノ如ク、長サ二寸余、皮、熟スレバ紫ナリ、（以下略）

と一致する表現が目立っている。

なお昭和二年一月には、本書の増訂版が発行されており、昭和初期に至るまで本書が俳諧の辞典として第一の地位を保っていたことがうかがわれる。

辞典の名を持つ歳時記では、明治四十四年十二月、博文館より刊行された『俳句大辞典』（阪元雪鳥著）もまた、明治期の最後を飾る大作であった。本書は俳句大辞典と称するが、内容的には、「四季に亘りて俳句の題材六百六十九種を選び、一々附するに説明を以てし」（凡例）た歳時記である。項目配列は五十音順となっている。

収録季題数「六百六十九種」は、四六版で六百頁近い大辞典

としては少ない。『袖珍俳句季寄せ』の千二百題よりもはるかに少ないのである。しかしこの辞典は、季題を精選した分、解説を充実させている。巻頭の「本書の特色」には解説の方針が次のように述べられている。まず、「名称、並びに科学的説明の項に於て、出来得可き丈、科学的説明を与へたこと。ここで「名称」の項とは季題の語義・語源を説く項のことである。また「一題につき必ず特色の一項を設けて、それが詩材としての特色を考究」し、「処々に美学的説明の項を置きて、俳題に対する美学上の考究の結果を略述」し、「間々伝説、並びに歴史を附見して、説明さるべき材料の由来を明らかに」した、とある。以上のやうに多面的な「項」から季題を語っている。そして「科学的説明」「美学的説明」「詩材としての特色」という視点は、近代の歳時記独自のものだ。加えてこの辞典は、「毎題必ず十数句」の例句、題によつては「和歌、漢詩、英詩などを引」いてさえている。英詩は例えば「秋風」では「テニソンの『プリンセス』の中」の「西風の歌」を原語で示している。なお本書の解説は口語体で、とりわけ「美学的説明」の項には、

秋風の美はその音にある。(中略) 眼には見えぬけれども、何物かが動いて、吾々の心に一種の悲調を響かせるところ、即ち Invisible なところが、秋風の特色である。その見えざる影には、言ふべからざる哀性の調音(Patheiical tone)があつて、人の心を暗い方へ、寂しい方へと導き入れる。(以下略)

——「秋風」

というような、英語までも混じえた明治風の美文調が見られる。最後に中谷無涯著『新修歳時記』について述べる。

明治四十二年から四十四年にかけて俳書堂から出版された『新修歳時記』全四冊は、明治の歳時記の到達点であつた。本書は幸田露伴に教えを受けた小説家・俳人の中谷無涯によつて編まれ、露伴が序文の筆を執っている。四冊はそれぞれ春・夏・秋・冬(含新年)に当てられ、各冊五十音順に季題を掲げて解説し、巻尾に部門分けの「季寄」を附している。収録された季題数は六千三百余で、明治期の歳時記の中では最多であろう。

本書の本文内容は、著者が「緒言」で「この『新修歳時記』も『年浪草』や『葉草』の解釈をそのまま用ひたところがある」と明かすごとく、この二大歳時記に依つた箇所が多い。例えば「貝寄」には

陰曆二月廿日前後に難波の浦部に吹く風を云ふ。此風に浜へ吹き寄せられたる貝を拾ひ取りて、聖霊会供養の造花などにつけて上宮太子の前へ献ず。

とあり、続いて「(年浪草)二月十九日天王子公人、日和迄と云ふことを」云々と「年浪草」からの引用をしているが、前の部分にしても、「(葉草)の、二月廿日前後に難波の浦辺に吹風を云也、(中略)此沖津風に浜へ吹きよせたる貝を拾ひとりて、聖霊会供養の造花などにつけて上宮太子の前へ献ず」に依つたのは明らかである。いっぽう動植物の解説には、「言海」に基づいた文章も多い。これには、「言海」をほとんどそのまま写したようなもの(例「小車」から、「言海」と「葉草」とからそれぞれ要点を拾ひ出してまとめたもの(例「鶯」)まである。しかし著者自身の考えの提示された解説文もある。例えば「藻に住む虫の音に鳴く」の項では、「(葉草)」が引用する数種類の説それぞれ

に検討を加えた上で、それらの中の「安齋の此説最も明快」という自らの判断を示している。さらに、外来の知識や科学的説明など、当時の新しい知識をも解説に取り入れている。例えば「桜草」に、「外国の花詞にては此花は、わかもの、悲しみ、を表示し、紅花なるものは、保護なき功績、を表示す。」と書き添えたり、「露」の生じる原理を、「空中に浮遊する水蒸気飽和点に達する時、温度の下降に遇ひて凝結するを露といふ。」云々と説明したりするのである。同時に新題の紹介にも積極的で、「グッドフライデー（聖金曜日）」や「シワージフェスチバル（英雄祭）」等までが挙げられている。英雄祭とはインドの祭である。以上の点から『新修歳時記』は、江戸期の知識の集大成である「年浪草」へ「葉草」の上に、明治の新知識をも盛り込んだ大作だったと考えてよからう。したがって本書は「葉草」を継ぐとともに、多方面の知識を収めた四季分冊の近・現代の歳時記の祖ともなっている。ちなみに、歳時記史上この書の後を継いだのは、昭和八年改造社から発行された全五冊の『俳諧歳時記』といえるだろうが、奇しくもその年の十二月、中谷無涯は六十二年の生涯を閉じている。

注

(1) 〈四季部類〉の復刊年月・出版者は左の通り。

- 明治十二年七月『増補四季部類大全』岡田寅之進
- 〃 十三年八月『増補四季部類大全』中山勝次郎
- 〃 十四年一月『拾遺四季部類大全』松田幸助
- 〃 十七年九月『俳諧四季部類』仙鶴堂

また、〈四季部類〉の改良書には次のようなものがあり、いずれも微かの新題の付加と、新暦への調整をはかったことが工夫点である。

発行年月・編者・書名・出版社の順に左に記す。

- 明治十三年三月浜真砂『明治増題俳諧新部類』藤森平五郎
- 〃 十三年七月山内梅敬『明治新撰俳諧季奇鑑』文開堂
- 〃 十四年六月神尾可三『明治四季部類』文江堂
- 〃 十五年九月山口素揚『古今新撰四季部類大全』風月堂・映雪堂
- 〃 十九年一月神尾可三『明治新刻四季部類大全』競英堂

（明治四季部類）の改題本

(2) 復刊年月・出版者を左に示す。

- 明治十八年六月、柳原喜兵衛等
- 〃 二十五年八月、積善館
- 〃 二十五年九月、礪川出版社
- 〃 二十六年四月、井冽堂
- 〃 二十七年三月、宋栄堂・鍾美堂

後記・本稿で取り上げた明治期刊行歳時記は全て国立国会図書館所蔵本である。資料閲覧にご高配賜ったことを厚く御礼申し上げます。なお引用に当っては漢字を現行字体に改めたほか、句読点のないものには適宜句読点を施しました。

また本稿作成に当たっては、関場武先生のご指導をいただきました。厚く御礼申し上げます。

（すぎうら こういち）